

京都大学	博士（地域研究）	氏名	増原 善之
論文題目	地域史からみたラオス・ランサン王国の成立と分裂 —「内陸交易国家」から「半港市国家」へ—		
（論文内容の要旨） 本論文は、東南アジア大陸部内陸地域における国家の生成と変容を明らかにするため、14世紀から17世紀までのラオス・ランサン王国を事例として取り上げ、同王国の成立、繁栄、分裂の要因を経済的視点から検討し、従来のラオス前近代史研究が行ってきた説明とは異なる新たな知見を提示しようとするものである。 まず第一章では今述べた問題提起とその研究上の意義について述べ、続く第二章では、14世紀から15世紀にかけてランサン王国が、アンダーマン海沿岸やタイ湾沿岸を始めとする「南方海洋地域」よりも、中国雲南地方を始めとする「北方内陸地域」と密接に結びついていたことを指摘し、同王国が「内陸交易国家」として成立・発展したことが明らかにされる。 第三章では、続く16世紀において、東南アジアの国際交易が急速な発展を遂げた「交易の時代」のなかで、「南方海洋地域」から東南アジア大陸部のランサン王国を含む内陸地域に対する商品需要が増大し、それに応える形で、ランサン王国の経済的ネットワークが南東方向へ拡大するとともに、経済活動の重心も北から南へ移動したことを示す。そして、ランサン王国にとって、16世紀という時代は、「内陸交易国家」から、地理的な意味で海に面してはいないものの、国際海洋交易と密接に結びついた「半港市国家」への転換期であったことを明らかにする。 さらに第四章では、「黄金時代」とも呼ばれた17世紀について、同王国内に成立していた商品流通システムの実態を検討するとともに、同王国に繁栄をもたらした経済的要因を明らかにする。また、近隣諸国との政治的・経済的関係にも言及しつつ、「交易の時代」の終焉とともに、ランサン王国の外国交易も徐々に減少し、同王国の「黄金時代」も幕を閉じた可能性があることを指摘している。そして、18世紀初め、同王国がビエンチャン、ルアンパバーン、チャンパーサックの三王国に分裂したのは、従来説明されてきたような王族間の派閥抗争の結果というよりも、16世紀から17世紀にいたる経済成長がもたらした地方国の政治的・経済的自立の表れと見るべきとする仮説を提起する。 次に第五章で、東南アジア大陸部内陸地域における国家の特質を同沿海地域と比較しつつ、以下のように述べている。まず、沿海地域では、大河川の下流域に、外国交易の過程で物資が集約される交易港と、そこから生み出される富を管理せんとする政治権力とが結合した中心が形成される。一方、内陸地域には、大河川の下流域のように物資が一点に集約される場が存在しないため、それぞれの地方において相対的に物資の集約に適した地点と在地の政治権力とが結合して中心が形成されるが、これは沿			

海地域のそれとは異なり、地方的な中心であり、王国そのものがそうした多中心的な連合体として機能していた。したがって、国王の政治権力がひとたび弱体化すると、これらの地方的な中心が自立に向かい、王国の分化が容易に進行するという特質が見られた。これは、なぜ、東南アジア大陸部内陸地域に強大な王国が成立しえなかったのかという設問に対する回答の一つであり、同地域の歴史研究に対する問題提起ともなっている。

最後に第六章で結論が述べられる。1560年のランサン王国のビエンチャン遷都は、それを王族内の派閥争いの結果とする従来の説に反し、ランサン国家そのもののありかたの根本的転換、すなわち「内陸交易国家」から「半港市国家」への転換を画したものであった。しかし結果的に交易の活性化は、それ自体が、多中心的性格を強くもつ内陸国家に対して遠心的な作用をもたらすことになったのであった。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、14 世紀から 17 世紀のラオス・ランサン王国の興亡を、交易という視点からとらえ、港市国家論の枠組みを援用しつつ、国際的な商品流通網の変化とそれに対するランサン王国の対応を軸に描き出すことで、従来のラオス史像を再検討するとともに、それをより広い東南アジア地域史の中でとらえ直すことを試みている。

本論文は以下の点において高く評価できる。

それはまず第一には、幅広い史料の活用によって、ランサン王国の歴史的変化を長期的な視点から明らかにしている点である。従来のラオス前近代史研究で使用されてきた史料は、ラオ語年代記や欧文史料に限られていたが、本論文ではラオス内外の碑刻文および慣習法、『明実録』を始めとする中国史料の活用をも試み、先行研究が示し得なかったランサン王国史像を描くことに成功している。

第二に、港市国家論の枠組みを援用することで、従来の研究視角からは見落とされてきたラオス史の新たな一面を解明していることである。本論文では、ラオスは海に面していないという一点を除けば、同時代に繁栄を極めた東南アジア港市国家群と多くの特徴を共有していることを、近隣東南アジア諸国、オランダ東インド会社、インド、中東、西欧市場との多面的な経済関係の分析を通じて解明し、閉ざされた内陸国家という従来のラオス像の再検討をうながしている。

第三に、ラオスをめぐる国際関係を複眼的な視点から明らかにすることで、前近代における東南アジア大陸部内陸世界の域内秩序について、ラオス一国を越えた問題提起を行っていることである。林産物の出荷を通して形成される内陸山地社会と沿岸港市国家との結節点としてランサン王国が機能していたこと、また複数の沿岸港市国家とのチャネルを操作することでランサン王国が域内での交渉力を強めていたこと、さらには複数の小中心の並存によって規定されるランサン王国のありかたそのものが、「交易の時代」の内陸への波及に伴い遠心力を強めていったことなどは、同地域の内陸世界の国際関係を理解するうえで再考を迫る重要な問題提起となっている。

第四に、前近代ラオスの社会構造と山地－平地関係への新たな視点を提示していることである。本論文は、ランサン王国における国家の生成と変容、山地民と平地民との関係、支配者層と平民や私的使用人との関係など、従来はじゅうぶんに論じられてこなかった主題群を独自の資料から解明しており、これはラオスに限らず隣接地域を理解するうえでも重要な貢献となっている。

第五に、文献を広汎に渉猟するいっぽう、独自の調査をふまえたラオス生態史の視点などをも参照することで、前近代ラオス社会のありかたを立体的に解明していることである。本論文では、林産物の採取方法やその用途等を明らかにすべく臨地調査を行い、ラオ語碑刻文の分布状況から同時代の経済的ネットワークを推定するなど、文献研究と臨地調査の融合を通して、東南アジア大陸部内陸地域を時間および空間の両面から総合的に考察した東南アジア研究の新たなありかたを提示している。

以上のように、申請者の論文は、前近代ラオス経済史のみならず、大陸部東南アジア内陸世界の国際関係や社会構造を考察するうえでも貴重な貢献をなしており、かつ歴史研究の知見に臨地調査や生態史研究の知見を総合するという点でも興味深い論点を提起し、東南アジア研究の進展に大きく寄与する優れた研究成果と判断される。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 24 年 1 月 27 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。